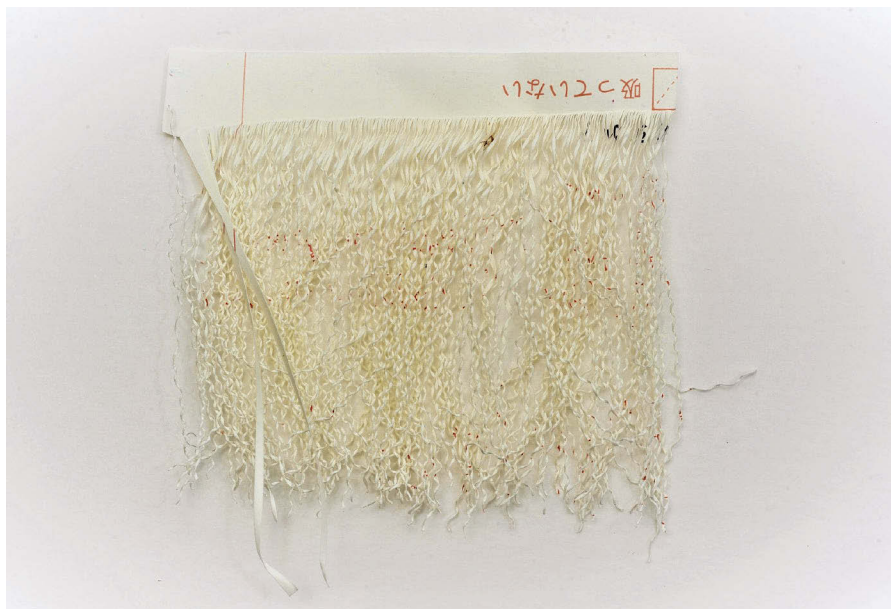


アートとケア

アール・ブリュットから受けるもの

11

アール・ブリュットとは、
美術教育を受けていない人々が創造する「生」の芸術。
心身に障害を持つ作家も少なくない。
あるがままの作家の内なる世界とのやりとりを迫る作品は、
私たちに何をもたらすだろうか。



「無題」

(2012-2013 年 技法：紙（問診表） H75 mm×L90 mm)

人生は楽しい

精神科医／社会福祉法人南高愛隣会 理事長
障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会 副実行委員長
田島光浩

日本のアール・ブリュットは、知的障害者等の日常生活から光を見いだしてきた歴史でもあります。福祉現場では課題と捉えられていたことが見直され、新たな角度から捉え直すことで再定義されてきました。

そこには、「自分を自分たらしめるための何か」を表現する精神的必然性を伴う能動的な行いが溢れています。「表現すること」は彼らの秘めた力を発揮できる舞台であり、人生における出番を増やします。

残念ながら、これまでの人生で主役になることが少なかった彼らは自己肯定感の低い方が多い傾向です。しかし、表現

を通じて、認められ必要とされることは自己肯定感を強烈に高めます。

また、「表現すること」を通して出会う、普段は出会うことの少ない他者からの称賛は、彼らにとって我々支援者から認められることよりはるかに魅力的です。自己肯定感の高まりは、人生の歩みに大きく影響します。

障害者福祉の現場でも、なぜ「表現すること」が必要なのか戸惑う場面がありますが、利用者の秘めた可能性を見つけ出し、外に拓いていくことは、創造性豊かな仕事となるはずで、「表現すること」を見つめ直すことは、人生を楽しくする1つの手段と成りえるかもしれません。

今月の作家

藤岡祐機

Yuki FUJIOKA

1993 年生まれ／熊本県在住

藤岡は広告や展覧会のチラシなどの紙を使い、1 mm にも満たない間隔で鯨のひげのように紙を切っていく。ハサミに角度をつけ、紙にスパイラル状のクルクルとした動きが出るように切ることによって、紙は表面と裏面とが双方に絡み合い、より立体的で躍動感のある作品が生まれる。幼少期からハサミで紙を切ることが好きで、現在のような制作が始まったのは12歳頃。紙を切る幅は少しずつ細くなっていた。（解説：小林瑞恵）

企画協力：NPO 法人キャンサーリボンズ
「サンクスナース」プロジェクト